



杏雨書屋(きょううしょおく)は大阪市にある公益財団法人武田科学振興財団が運営する図書資料館。国宝や重要文化財のほか、国内でもトップクラスの古医書を収蔵しています。このコーナーでは先人が古医書に残した現代に通じるメッセージを、小曾戸先生に紐解いていただきます。2013年10月、杏雨書屋は大阪市中央区道修町に移転しました(本誌21ページを参照)。

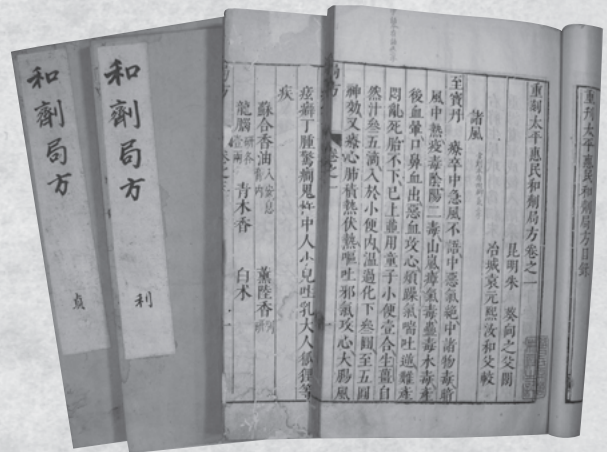
其ノ六 和 劑 局 方 一 安 中 散 一

案内人◇小曾戸 洋(北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部 部長)

ベストセラーとなった漢方薬の解説書

ストレージタイプIは中国の医学書『和劑局方』に載る安中散(桂皮・延胡索・牡蛎・茴香・甘草・縮砂・良姜)という処方に基づいています。『和劑局方』は正式名称を『太平惠民和劑局方』といいます。宋の時代、歴代皇帝は国民の福利(太平)と厚生政策に力を入れ、その一環として、12世紀初めに和劑惠民局(和劑局)と称する国立の薬局を設置し、既製の薬剤を販売しました。『和劑局方』はその国定処方の解説書ともいべきものです。現在、薬局に必携の『日本薬局方』の名称もこれに由来しています。

『和劑局方』は初版が出版されて以来ベストセラーとなり、次々と優秀処方が追加されて、13世紀の半ばに至るまで改訂版が5回も刊行されました。安中散は第4改訂版(1226年頃)から収録された名処方です。日本に伝えられたのも鎌倉時代と早く、『和劑局方』は室町時代から江戸時代を通じて日本の医家に用いられました。今日でも『傷寒論』や『金匱要略』に次いで出典頻度の高い中国医書です。



杏雨書屋蔵『和劑局方』(中国・明刊本)

お腹の痛みや胸やけにすぐれた効果

安中散の「安中」とは文字どおり「中を安んずる」ことです。中とはなんでしょう。中国伝統医学では、人体の体幹部位および生理機能を上・中・下の3部に分けました。これを上焦・中焦・下焦という場合もあります。大まかにいうと、上焦には肺(呼吸機能)、中焦には脾・胃(消化器系)、下焦には腎・膀胱(泌尿器・生殖器系)の機能が属します。つまり、中とは中焦のことで、漢方という脾胃は現在の胃腸とほぼ同義ですから、「安中」とは「胃腸を安和にする」ということになります。

『和劑局方』では安中散の主治症を「脾疼(胃痛)」「飢胃(胃痙攣)」と述べています。安中散は長年の経験でその効能が確認された優秀な漢方胃腸薬なのです。



安中散は宋代に考案された胃腸薬の名処方です。

小曾戸 洋(こそと ひろし)

日本医史学会理事長、杏雨書屋副館長、上海中医薬大学客員教授。1950年山口県下関で小曾戸薬局を営む小曾戸丈夫氏の長男として生まれる。宋の時代に散逸した貴重書『小品方』の発見や馬王堆(まおうたい)という中国湖南省にある紀元前2世紀の遺跡で発見された医書の解説により、中国でも医史学研究で著名な成果をあげる。主な著書『日本漢方典籍辞典』(大修館書店)、『中国医学古典と日本』(塙書房)、『漢方の歴史』(大修館書店あじあボックス)。